



鳳凰 わが愛

2007(平成19)年10月15日鑑賞〈角川映画試写室〉

監督=金琛ジンチェン／脚本=申捷シェンジェ／出演=中井貴一ナカイキイチ／苗圃ミョウボ／郭濤グオタオ／孫青青スンチンチン／余皑磊イーカイレイ (角川映画配給／2007年日本、中国映画／121分)

……『ヘブン・アンド・アース』(03年)で消化不良気味だった(?)中井貴一が、プロデューサー兼主役としてドブリと中国映画に……。刑務所内に咲いた崇高な愛を、鳳凰に象徴して描く壮大な叙事詩は、派手さやドラマティック性はないものの、大きな感動でいっぱい……。1920年代以降の中日の歴史を勉強しながら、タイトルそのもののテーマをじっくりと味わいたいものだ。

私と同じように、中井貴一も中国映画にドブリと……?

私は2000年8月の大連・旅順・瀋陽旅行以来中国旅行に、そして2004年6月19日～7月30日にシネ・ヌーヴォで開催された「中国映画の全貌2004」以来、中国映画にドブリとハマっている。他方、『ヘブン・アンド・アース』(03年)ではじめて中国映画に姜文チアン・ウェン、趙薇ヴァイツキー・チャオと共演した中井貴一も、どうも私と同じらしい……。名優佐田啓二の息子として生まれ、姉の中井貴恵と共に日本を代表する俳優として、1984年の『連合艦隊』以降華々しい活躍を続けてきた中井貴一にとって、主に中国の新疆ウイグル地区で行われた4カ月にわたる『ヘブン・アンド・アース』の撮影がカルチャーショックだったことは、彼の『日記「ヘブン・アンド・アース」中国滞在録』を読めば明らか。しかし、それによってもう2度と中国での映画撮影はゴメンだと考えず、逆に今度は自分がプロデュースしてまで中国で主演作品をつくりたいと考えた彼は立派。これはまさに、中国映画好きが高じて、遂に去る10月10日北京電影学院での特別講義を実現させ、さらに中国語による『坂和的中国電影論』の出版を企画

している現在の私のスタンスと全く同じ……？ 日本を代表する人気俳優である中井貴一と大阪の一介の弁護士である私を単純に対比するつもりは毛頭ないが、中国映画にハマった点は2人とも全く同じ……？

日中国交回復の意義と重みは……？

安倍晋三内閣が崩壊し、福田康夫内閣が成立したというニュースが氾濫する中、2007年9月29日の新聞各紙は、一面を使って田中角栄と周恩来が握手している日中国交回復35周年を祝う記事を掲載した。私が10月10日に北京電影学院で実質3時間の特別講義をした時も、この記事を見せながらその意義について述べたが、1972年9月29日のこの2人の握手は、はかり知れない重みがあるもの。

中井貴一が俳優として、またプロデューサーとしてこの映画を企画したのは、まさにこの日中国交回復35周年を記念するため。プロ野球のセ・リーグ、パ・リーグを通したクライマックスシリーズ戦やボクシングの内藤大助 vs. 亀田大毅戦を楽しむのも悪くはないが、他方では、せめて日中国交回復35周年という記念の年をこの映画を観ながらかみしめるくらいの勉学意欲が欲しいと私は思うのだが……。

新聞記事がヒントに

同日日に観た戴思杰^{ダイ・シージェ}監督の『中国の植物学者の娘たち』(05年)は、同じ工場に勤める2人の若い女性が同性愛者で、どちらかの父親の殺害容疑で死刑を宣告されたという事件を報じた新聞記事がヒントになったらしい。しかして、この『鳳凰 わが愛』も金琛^{ジン・チェン}監督が読んだ、刑務所の中で30年間ひと言も言葉を交わさないまま愛を育み続けた男女を紹介する新聞記事が基になっているとのこと。

そんな感動的な実話を映画化するについては、誰がどのように脚本を書くかがポイント。『中国の植物学者の娘たち』は戴思杰^{ダイ・シージェ}監督自身が脚本を書いたが、プレスシートによれば、『鳳凰 わが愛』は舞台、映画、テレビドラマで才能を発揮する若き脚本家申捷^{シェン・ジエ}とのこと。そして、その脚本を読んだ中井貴一はすぐにこの企画に賛同し、肩書きだけのプロデューサーではなく、脚本を練り込むためのシナリオ・ハンティングから、キャスティング、セット・デザイン、資金面のやりくりまで、あらゆる局面に参加。日本人俳優として初の海外作品プロデューサーという重責をまっとうした、というわけだ。

なぜ2人は刑務所に……？

映画の冒頭、野外劇場で恋人と並んで楽しそうにスクリーンを見つめている劉浪^{リュウ・ラン}（中井貴一）の姿が登場する。そんな中、背後に座った男が恋人にチョッカイを出してきたことが、劉浪^{リュウ・ラン}が懲役15年の実刑判決を受けることになったきっかけ。つまりこんな些細なイザコザから、劉浪^{リュウ・ラン}はその男に傷害を負わせ、大きくその人生を誤ることになったわけだ。そのうえ傷害犯が刑務所に収監されたのをよいことに、その男にレイプされた恋人が自ら命を絶ってしまったと劉浪^{リュウ・ラン}は面会にきた母親から聞かされたから、もはや彼の心はズタズタにされ、生きる希望さえ失ってしまったのは当然。そんな劉浪^{リュウ・ラン}は、刑務所内で自暴自棄な行動に走るものの、他方ではその男への復讐を誓い、それが生きる糧となっていくことに……。

他方、女囚周紅^{ホン}（苗圃^{ミヤオ・プク}）は、夫の暴力に耐えきれず夫を殺してしまった罪で死刑を宣告されていたが、妊娠2カ月だったため死刑を免れたのはラッキー。ところがこちらも自暴自棄になっていることはその思いつめた表情から明らか。

そんな2人が出会ったのは、男女混合の懲罰の場。2人が知り合い、劉浪^{リュウ・ラン}は氷の彫刻大会で自分が作った鳳凰の彫刻を周紅^{ホン}に見せようとするところまで、2人の心が近づいていくところがこの映画最初の見どころ。鳳凰は鳥と蛇が一つになったもので、酉年^{ホン}の周紅と巳年^{リュウ・ラン}の劉浪の愛を象徴するもの。つまりその製作は、言葉を交わすことのできない刑務所の中で、唯一の愛情表現の手段だったわけだ。

この映画のテーマは……？

この映画のテーマは、まさにそのタイトルどおり、中国の伝説の鳥、鳳凰に象徴される刑務所内に咲いた男女の永遠の愛。見つめ合うこともままならず、言葉を交わすこともできない中で育まれていく2人の愛を、「刑務所内に咲いた恋」というフレーズで表現するのはあまりにも軽すぎる感がある。中井貴一が全編中国語をしゃべってまで劉浪^{リュウ・ラン}役に全力投球したのは、そんな崇高な愛を求めて30年間も生きた男の一生に限りない魅力を感じたためだが、映画としてはそんな崇高な愛を表現するのはなかなか難しいところ……？

作業中に深い谷の中に落ちてしまった周紅^{ホン}を助けるために、彼女を追って自らも穴の中に落ちていった劉浪^{リュウ・ラン}だったが、それによって結果的にしばらくの間2人でハッ

ピーな時間を過ごすことができたのはラッキーだった。しかしこれは、あくまで脚本の妙によって実現できたことで、現実問題としては多分絵空事……？ しかし、映画としてはそんなハプニングを挿入しなければ、あまりにもテーマが重々しすぎて観客がしんどくなってしまはず……？ そういう意味では、鳳凰に象徴されるような刑務所内で咲いた崇高な愛というテーマをスクリーン上に表現するのはかなり難しい作業……？

^{リアン}老良頭がいい味を

この映画は全編社会から隔離された刑務所内が舞台だから、全体的に暗いトーンになるのは仕方ないところ。しかし申^{シエン・ジェ}捷の脚本は、そこにうまくドラマティックな要素をまじえながら2人の恋模様(?)を描いていく。

その手助けをするとともに、ストーリー構成上重要な役を演ずるのが、ちょっととぼけたいい味を出している老良頭^{リアン グオ・タオ}(郭濤)。彼の説明によると、彼は無実の罪で刑務所に入れられているらしいが、その真偽のほどは……？ また、さかんに占ってやると言うのだが、その占いが当たった試しは……？ そして、長い刑務所暮らしの中、彼の行きつくところは……？

歴史のお勉強に最適

この映画を壮大な叙事詩にさせているのは、何ととっても辛亥革命から新中国建国に至るまでの中国の歴史ドラマ。刑務所の支配権は時の権力が握るものだから、①1910年代の軍閥の時代、②1920年代の国民党の時代、③1932年の満州国建国以降の日本支配の時代、④1945年の日本敗戦、⑤1946年の国共内戦から1949年の新中国建国までの時代、と大きく時代が動く中、刑務所のあり方も大きく変化していったのは当然。まず私は、1920年代の軍閥から国民党に権力が移行していく時代に、男と女の刑務所がこんなに接近しているのを見てビックリしたし、男女混合の懲罰の場があることにもビックリ。1931年の満州事変と1932年の満州国建国によって刑務所が事実上日本の支配下におかれる中、男女を分離して収監することが決定されたというから、その点では従来の中国流よりも日本流の方が正当……？ もっとも、これによって劉^{リュウ・ラン}浪と周紅^{ホン}は完全に引き離されることになったから2人にとっては不幸なこと。その別れに際して、周紅は「わたし、待っているから！ あなたが出てくる日を！」

と叫び続けたが、さて……？ また、日本を追い払った後の国共内戦の結果、国民党の旗色が悪くなり南方へ敗走していく中、囚人を恩赦という形で釈放し、看守たちも国民党とともに逃げていくというのも混乱した時代なればこそこの現象。最終的に劉^{リュウ・ラン}浪が収監されていた刑務所は人民解放軍の駐屯所になってしまったため、やっと自由の身となった周^{ホン}紅がそこを訪れても、もはや劉^{リュウ・ラン}浪はいなかった。しかし、そこには劉^{リュウ・ラン}浪が彫った鳳凰の姿が残っていたから、周^{ホン}紅も苦勞してここまでやって来た甲斐があったというもの……。

このように、この映画を観るについては、刑務所の権力の移り変わりとその背景となる歴史の動きのお勉強をしっかりと……。

ここにも第6世代監督が

中国第6世代監督としては、『長江哀歌（ちょうこうエレジー）』（06年）の賈^{ジャ・ジャンク}樟^{フートン}柯監督、『胡同のひまわり』（05年）の張^{チャン・ヤン}楊監督、『ココシリ』（04年）の陸^{ルー・チュウアン}川監督らが既に世界的に有名で、私もよく知っているが、1969年生まれの新^{ジン・チン}金^{チン}琛監督も第6世代。

もっとも彼は、北京電影学院出身ではなく中央戲劇学院演出科卒で、デビュー作の『インターネット時代の愛情』（98年）や『菊花茶』（00年）でさまざまな賞を受賞しているとのことだが、私はこの2本とも観ておらず、彼の作品を観たのは今回がはじめて。また、彼はテレビドラマの演出を多数手がけているとのことだが、映画としてはこの2本だけだし、多分日本では未公開……？ したがって、プレスシートに書かれている「中国第六世代の監督として現在最も期待されている気鋭である」というのはちょっと誉めすぎ……？ しかし、美しい映像はロケ地へのこだわりが明らかだし、これだけの重々しい題材をうまくまとめた総合力も大したもの。私としては、新たに知った第6世代監督として、これからも注目していかなければ……。

苗圃^{ミャオ・プ}は……？

プレスシートには時々女優の生年月日を書いていないものがあるが、苗圃^{ミャオ・プ}を紹介するこの映画のプレスシートがそれ。すなわち、そこに書いてある彼女についてのデータは、1995年に『道北人』でデビューした後いくつかの映画に出演し、1998年に北京電影学院に入学したということ。また、その後も多数の作品にコンスタントに出



©2007「鳳凰」製作委員会

演し、「中国の新しい時代を担う4大女優の一人と言われている」ということ。しかし、中国映画通を自認している私も、^{ジヌ・チュヌ}金 琛監督と同じく彼女の名前はこれまで全然知らなかった。また、中国四大女優が^{チャン・ツイイー}章子怡、^{ツイッキー・チャオ}趙 薇、^{シュー・ジンレイ}徐 静 蕾、^{ジョウ・シエン}周 迅の4人だということはよく知っているが、彼女が「中国の新しい時代を担う4大女優の一人と言われている」とは全然知らなかった。そこでネットで調べてみると、彼女の生まれは1977年とのこと。またそこに書かれている意見では、「特に美人というわけではないが、確かな演技力と存在感は同世代の女優たちと比べてもぬきん出ているのではないか。すでに早くも『実力派』と呼ばれている」とのこと。私としてはこちらの意見の方に賛成で、プレスシートはちょっと誉めすぎ……？

説明不足(?)が、逆に考えさせる格好のネタ……？

この映画では、^{リュウ・ラン}劉 浪が傷害事件で刑務所に入った時期は明確にされていない。プレスシートの「物語」では1920年代と書かれているが、水野衛子氏（中国映画字幕翻訳者）の「映画『鳳凰 わが愛』の時代背景」には、「リュウ・ランが瀋陽の監獄に入ったのはまさにその間の1914年のこと」と書かれているから、一致していない。

さらに、彼の罪は懲役15年だから、本来なら、中国が日本に勝利した1945年まで刑務所に入っているはずはないもの。彼が釈放されたのは、日本を追い払った後共産

党との内戦に敗れた国民党が刑務所を投げ出して敗走する1948年だから、実質約30年間刑務所に入っていたことになる。これは、彼が逃亡を試みたことなどが影響しているのかもしれないが、私にはそれがよくわからないところ……？

また、周紅が釈放されたのは刑期を全うしたからではなく、女だけの刑務所に収監された後、その刑務所が大地震によって崩壊し、周紅が唯一人の生存者として出所することになったためだが、こんな大地震が中国でいつ発生したのか、その歴史的事実については全く説明されていない。そういう意味ではこの映画は少し不親切な面もある(?)が、それが逆に、最後に登場する若い頃の劉浪が辮髪を切り落とすシーンなど、あの激動した1910年代から1949年までの中国の歴史を考えさせる格好のネタになる面も……。ちなみに水野衛子氏の分析によれば、「リュウ・ランはおそらく1881年の生まれ、ホンは1897年生まれ、リアンは1875年生まれと思われる」とのことだが、さてあなたの分析では……？

30年後の再会は……？

中国の東北地方は寒いから、冬は雪や氷で覆われてしまうのは当然。この映画では、中盤に劉浪と周紅が氷の上を歩いている時、氷がミシミシと不気味な音をたてて割れていくシーンが登場する。もちろん、私はこんな体験をしたことはないが、北国の人にはこれに近い体験をした人がいるかもしれない。そして、そんな人なら足元の氷が割れていく底知れない恐さがわかるはず。氷が割れ、身体がその中に沈んでしまったら、再び浮かびあがることはできるのだろうか……？

日中戦争が終わり、また国民党が共産党によって駆逐された後、劉浪は必死に周紅の足どりを追い続け、今やっと周紅の姿を目の前にすることができたが、さて周紅は今どこで、どんな生活を……？「30年ぶりの再会」とひと言で言うにはあまりにも重い人生の積み重ねだが、それでもやっと実現しようとしている30年ぶりの再会に向けて、この映画はどんなドラマを用意しているのだろうか……？

全編中国語のセリフを完全にマスターし、渾身の力で劉浪を演じた中井貴一は、最後のクライマックスではどんな演技を……？他方、自ら劉浪を訪ね歩き、かつて劉浪が入っていた刑務所まで1度はたどり着いた周紅だが、彼女は今劉浪に対してどんな思いを……？そんな最後のクライマックスのドラマは、大きな感動の涙の中、どうかあなた自身の目で……。 2007(平成19)年10月20日記